



南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

求めよう、神のちむがなさを！
守ろう、沖縄における人権を！
探そう、真の平和への道を！

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2019年4月1日（毎月1日発行）

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第725号（4月号）



主と共に新しい命に生きる

ご復活、おめでとうございます。特に今年の復活祭で洗礼を受けられた皆さん、おめでとうございます。新しい兄弟姉妹を迎えることで那覇教区の共同体がさらに豊かになると思います。心からお慶びを申し上げます。

那覇教区長 ウェイン・F・バートン司教

皆さんご存知のようにキリストの復活によって、私達の人生は全く新しくされる可能性があります。それは私達が復活の主を信じることによって、死が終わりではなく、死を過ぎ越してゆく確かな希望と力が与えられるからであります。「私達は洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私達も新しい命に生きるためなのです」（ローマ六4）。

聖パウロは、私達が主の復活の命にあずかるためには主を信じて洗礼を受けることが大切であると語りまします。洗礼には「浸す」という意味があります。それは古い自分に死んで、主の復活の命によって新しい自分に甦ることを表わします。つまり古い自分が主と共に死ぬことによって罪から解放され、主と共に新しい命に生きる者となるのです。

そして主と共に「新しい命に生きる」とは、私たちが神様と同じようにすべての命あるものを大切にす

る使命に生きるということ。知恵の書には次のような神様への祈りがあります。「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられないのなら、造られなかったはずだ。あなたが望みにならないのに存続し、あなたが呼び出されないのに存在するものが果たしてあるだろうか。命を愛される主よ、すべてはあなたのもの、あなたはすべてをいとおしまれる」（知恵の書十一・24-26）。「命を愛される主」はすべてに存在をお与えになりました。私も、あなたも、地球も、宇宙も、すべては神からのものです。そして人間を創造された時、特別な責任を与えました。「神は、ご自分にかたどって人を創造され」（創世記一・27）、そのかたどりのある人間を被造物の管理者として任命されました。「神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の土を這う生き物をすべて支配せよ』」（同一・28）。この任命の意味は、即ち愛そのものである神のように愛する者となるために必要な自由をもつてすべての存在・命あるものをいづくしむという責任を与えたということです。

すべての生きているものは命の光

と死の影の間を歩んでいます。聖フランシスコはすべてのものを兄弟姉妹と考え、命を育むための被造物すべてを大切にしました。同じように私たちは沖縄の大自然を大事にする使命があります。すべてのものは神の御手によって生かされ、存在します。人間が存在と命の尊さを考えずにそれを利用することは神の御心に適わないことです。反対に存在と命を育むことが神の御心に適うことなのです。神は「命を愛される主」であります。

ところで神の似姿としての人間の命は特に尊いものです。「隣人を自分のように愛しなさい。」（ルカ九・27）とか、「わたしがあなたがたを愛したようにあなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ十三・34）という聖書の言葉があります。人間の基本的な権利は神が付与された存在と命の権利です。受胎したその時から神の御許に帰る時まで人間の命はその生存権によって守られなければなりません。これがすべての人間の基本的な権利であり、信仰の目を見た人間の権利です。

このように神にまでさかのぼる深い人間理解こそが、先祖様が教えて下さった「ヌチドゥ宝」の意味でもあります。

神様から頂いたすべての存在と命を大切にされる皆さん、復活祭、おめでとうございます。神様の祝福と恵みが皆さんと共にありますように。

“Living our new Life with the Lord”

Dear Brothers and Sisters,

Happy Easter! Special congratulations to those who received Baptism during the Easter Celebrations. I think that in welcoming new brothers and sisters to the Diocese of Naha, our communal life together will become even more fruitful and abundant. My heartfelt joyful best wishes to all our new brothers and sisters.

As you know, through the resurrection of Christ, it becomes possible for our entire lives to be completely renewed. By this I mean that by believing in the resurrected Lord, rather than our lives ending at death, we are offered the firm hope and strength to pass over from death to eternal life. We can even now have a taste of this resurrected life by receiving Baptism. “So by our baptism into his death we were buried with him, so that as Christ was raised from the dead by the Father’s glorious power, we too should begin living a new life.” (Romans 6:4). St. Paul says that if we want to have a share in this new life of the resurrected Lord, it is important that we believe in the Lord and receive Baptism. As you know Baptism has the meaning of “immersing”. This means that the old self dies through this immersion, and we emerge from the baptismal waters to live a new life that is given to us by the resurrected Lord. Through the old self dying with the Lord, we are freed from sin, and we become a person who can live this new life with the Lord.

For us to live a new life with the Lord, we must undertake the important mission of respecting the integrity of all life, as the Lord Himself does. In the book of Wisdom, there is this prayer to God. “Yes, you love everything that exists, and nothing that you have made disgusts you, since, if you had hated something, you would not have made it. And how could a thing subsist, had you not willed it? Or how can it be preserved, if not called forth by you? No, you spare all, since all is yours, Lord, lover of life!” (Wisdom 11:24-26).

The “Lord, lover of life” created everything. Me and you, the earth and the universe, everything belongs to God. And when God created human beings, he gave us a special responsibility. “God created man in the image of himself, in the image of God he created him, male and female he created them.” (Genesis 1:27). And to human beings who are created in his image, he gave responsibility to care for all of creation. “God blessed them, saying to them, ‘Be fruitful, multiply, fill the earth and

subdue it. Be masters of the fish of the sea, the birds of heaven and all the living creatures that move on earth.” (Genesis 1:28). The meaning of this commission is that, in the same way that God loves life, we have been commissioned to love and care for all life as God Himself does.

All living beings walk between the light of life and the shadows of death. St. Francis thought that everything created was his brother and sister. He nurtured created life and treated all of creation with respect. In this same way, we too have the mission of caring for the nature of Okinawa. All life lives and exists because God sustains it. Using and endangering life without concern for its preciousness is not in accord with the Will of God. But nurturing life, on the other hand, is always in accord with the Will of God. This is because God is the “Lord, lover of life”.

Human life is particularly precious. The scriptural words, “Love your neighbor as yourself” (Luke 10:27) and “Love each other as I have loved you” (John 13:34) remind us how precious human life is to God. The basic right of human beings is the right to the life granted to them by God. All human life must be protected from the time of conception until the time when God calls each person to their eternal reward. This is the basic right of all human beings, a basic human right to exist as seen through the eyes of faith, the right to life. This is also the meaning of the traditional Okinawan saying, “Nuchi du Takara”, “Life is Precious,” which has been conveyed to us by our ancestors; words which echo all the way back to the beginning of creation and reflect a deep wisdom concerning the value of our God given life.

After Easter many of the priests of the diocese will be moving to new parishes. Living our new life with Lord, will call for each of us to be open to each other, to new ideas, and to new ways of doing things. This will call for us to be generous, open-hearted, forgiving and for us to treat each person, whether they be a priest or a lay Catholic with a gentle spirit of acceptance.

To all my brothers and sisters who treasure all life that is given to us by God, Happy Easter! May the blessings and graces of God be showered upon all of you during the Easter Season.

By: Bp. Wayne Francis Berndt, O.F.M. Cap.



神さまの恵みだけで 十分です

ダノ・ゼルナ神父
読谷教会 主任司祭



ある時、四人の神父が公園のベンチに腰掛けて談笑していました。その折に、一人の神父が、ひとつの提案をしました。皆よい友だちだし、せっかく、四人がそろっているのだから、それぞれが抱えている問題を分かち合おうと言うのです。皆賛成しました。それじゃ、ということで、一人の神父が、「実は私の問題は、酒を飲みすぎるのとだ」と切り出しました。それを聞いた三人の神父はため息をつきました。次は、別の神父が、彼の

話していない神父がいます。彼は話そうともしません。それで、三人の神父が、彼にも話そうというながしました。その神父はどう言え、ば良いか分からないと言うのです。それで、彼の秘密がもれることは絶対にないから、安心して打ち明けるように勧めました。それでその神父は、「自分はうわさ話が好

問題はギャンブルである事を打ち明けた。」「いけないと分かっていても止められない」と言うのです。

そこで、三番目の神父が話し出しました。彼は女性問題を抱えていました。信者さんを好きになつてしまったのです。また、皆、大きなため息をつきました。もう一人、まだ何も

きで、聞いたことは、何でも、すぐに人にしゃべってしまうのです」と言ったのです。

今日は、皆さんと、聖パウロの手紙について分かち合いたいと思います。これは、聖パウロのちよつとした告白です。彼は自分の問題を、自分の身に与えられたひとつの「とげ」と呼んでいます。それが何であるかは、私たちの知るところではありません。それについてひとつだけ確かなことは、それが、パウロを苦しめていることです。それで、パウロは、神さまにそれを取り去ってくださいと願ったのです。最初にお話した四人の神父も、聖パウロも、私たちも、弱いところを持つている点では皆、同じです。その弱さの中には、恥ずかしくて、人に言えないようなこともあるでしょう。

でも、神さまは聖パウロに「わたしの力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。これはどういう意味でしょうか？それは、私たちが弱い者であつても、神さまは、私たちを通して不思議な業をなされる、すなわち、人間の力のみでは不可能なことでもなされるということです。

私自身について言えば、よく罪

の誘惑を感じていた私が、どうして司祭になれたのでしょうか？どうしてこのように、司祭職を続けていられるのでしょうか？神さまは、ご自分の力を私の弱さの中において示されたのです。皆さんについても、同じです。神さまは、私たち皆の中で働かれます。

聖パウロが自分の弱さを誇ると言うとき、それは、自分の罪への傾きを喜んでいいるものではありません。彼の弱さにもかかわらず、主の力が彼の内に働かれることを喜んでいいるのです。神さまの力が、私たちの内で働かれるということにはまぎれもない現実です。手紙の中で聖パウロが明らかにしているのは、まさに、その事なのです。

私たちは、しばしば、自分の弱さに打ちのめされ、自信を失い、何でも、簡単にあきらめてしまします。自分を信じないので、他の人のことも信じられません。そして、人のことを罪深い、悪い、弱い人間だなどと否定的に見てしまします。また、多くの人は、自分はどうせ変われないと言つて、あきらめてしまします。依存症から立ち直ることは、絶対に無理だし、自分の弱さも、罪深さも変えられないと思ひこんでいます。真実は、

誰も、自分の力だけで変わることには出来ないということです。神さまの恵みなしでは変わりません。神さまは、私たちを通して、この世界に働きかけておられるので、私たちが弱く貧しい者であつても、イエスさまによつて、私たちは価値あるものにされるのです。周りの人が、私たちを通して変わり、新たに生まれかわることができるようです。私たちは、自分の弱さを理由に、神さまが私たちの内で働かれるのを止めることは出来ません。

私たちは弱い者であつても、信仰を広めなければなりません。誘惑に打ち勝ち、神さまの仕事をすすめるためには、神さまの恵みだけで十分です。信仰、愛、イエスさまの力は、私たち自身の弱さにも関わらず、広がります。私たちの内に働く神さまの力は、私たちを新しい人にし、私たちを回心に導きます。

私たちが、神さまの呼びかけを聞くことができるように祈りましょう。そして、いつも、すすんで神さまのために働きましょう。また、私たちをはじめ、すべてのクリスチャンの回心のためにも祈りましょう。

ロザリオを修理してもらったことが縁で、二〇一七年五月に大阪の修道院で初めましての挨拶を交わした観想修道会会のシスターから分ち合いの文章が届きました。シスターの許可を頂きましたので、皆さんにも分ち合いたいと思います。

「今思えば抗がん剤はかなりしんどいものでした。不思議に仕事はなんとかしていました。が、時間は三倍くらいかかりました。抗がん剤治療が始まり日に日に体力が減退してゆきました。階段の上り下りがしんどくぜいぜいして来ました。心臓の負担が大きくなり、その時はすこし横になるとやがて回復しました。いずれにせよ、明日のことは考えられなくなりました。今日の計画がやつとできました。今日はこれをしよう。一つの事ぐらいでしたが、とにかく、一日一日を生きてゆくのが精いっぱいでした。体と相談しながらです。体力がだんだん落ちて行くのが分かります。今まで出来ていたことが出来なくなる。何でもないことが、大した仕事になる。感情面の起伏の停滞。抗がん剤は良い細胞も破壊してゆく、それを理解しまし

た。髪の毛も無くなって行き、皮膚の障害。体が老化してゆくを感じました。老人になるとはこんなことだと感じました。そしてすべては朽ちて行く。諸行無常を感じました。すべては過ぎ去る。失われて行く。それを体験しました。そうです。一切は過ぎ去るとはつきりと知りました。そして、この私も死んでゆく。何か本当に下降してゆくを感じました。崩壊

の定め。眞実の姿でしょうか？それは、ある意味で死の道行きのようでした。暗闇。迷妄。その中で、私は見つけました。総ては失われて行く。総ては無くなってしまう。その中で、たつた一つ決して無くならない物がある。それが見えて来ました。それは、『永遠の命』でした。私は永遠の命を頂いている存在なのだと。はっきり分かりました。そうです。信仰箇条で信じておりましたが、それが本當にそうなのだと分かりまし

たて軸よこ軸

存在の祈り

首里教会

新田 選

た。そして理解しました。私たちは最も大切な物を頂いている。永遠の命を頂いているのだ。健康であるか病気であるか……それらがどうでもいいと思えました。私たちは死を越えるものを頂いている。溢れる涙。まさに滂沱の涙で私の心も洗い流されました。雨に打たれ土や埃、害虫そうした一切のものが洗い流されたように、雨の後に太陽の光の中で木の葉が

の中で木の葉が輝きを増すように。私のころは爽やかになりました。それは、実に深い体験でした。闇から光

しかし、この時分かりました。癌の方がうつになりやすいと言うことを、少しでも理解させて頂いたと思いました。そして同時に、苦しんでいる人に光を注ぎたい。深い苦しみの中で最も素晴らしい宝物を頂いている存在であることを知らせたい。切なる思いに駆られました。もし、言えるならそれが私の使命ではないかと。なぜなら、私自身がそれを体験して、死を越えるものに出会ったか

らです。

それから、まるで神様に導かれるように、正確に言うのと神様が主導権を取られたと言うべきでしょう。不思議な二年間でした。副作用で夜が寝られませんでした。しんどくて気分が悪く、ベッドにうずくまっていた。ひたすらにじっとしているほかありませんでした。その中で何かを考えることは不可能でした。まして口ザリオの祈りや、他の祈りなどできたものではありません。

しかし、ひたすらじっとして
いて、ふと気づいてみれば、私
はゲッセマネのイエス様の元
に留まっていた。不思議で
した。かつて元氣な時夜目が
覚めて眠れない時には祈れま
せんでしたが、こんな状態の中
で、ひたすらにゲッセマネのイ
エス様に留まっていた。す
べての思考が停止して、難しい
ことを考えることが出来ない。
知恵あるものは、知恵を使って
色々と考えます。想像力を使っ
て黙想します。

それが出来なくて。ただ沈黙
のうちに留まっていました。非
常にシンプルな祈りです。これ
が、存在の祈りだと思いまし
た。そうして、昼も夜も存在を

もってその祈りに留まりました。いえ、留まっていられなかった。このようにシンプルな祈りを今までしていまませんでした。無力であることの偉大さに驚きました。

ここまで書いて晩の祈りと念祷に入りました。そして、その後とても清々しい気持ちになりました。神様から、あの時すべてを頂こうと思ったことを思い出し、心が晴れやかになり、深い平和と温かさがこころに流れ込んで来ました」。

いつか、そうした深い境地に達したいものです。

那霸教区平和委員会

日 時：4月28日（日）午後2時～4時

場 所：カトリック安里教会

講 師：那覇教区長 ウェイン・F・バート司教

演 題：「朝鮮半島三・一独立運動100周年を迎えて」

カトリック那覇教区平和委員会

問い合わせ ☎090-1949-6569 (稲福)

4月例会



那覇教区平和委員会



2月例会の報告

辺野古新基地建設は頓挫する

2月の平和委員会の例会は2月24日、沖縄平和市民連絡会の北上田毅氏を講師としてお迎えした。当日の演題は「辺野古新基地建設は頓挫する。」副題としては「繰り返される違法工事の現状と『軟弱地盤』、『県外からの埋立て土砂』問題について」であった。北上田氏は京都大学で土木工学を学び土木技術者として京都府内の役所で30年間勤めた。2008年に沖縄に家族で移り住んでいるとのことである。

当日は立ち見が出るほどの盛況ぶり、優に80名を超えていた。またその日は県民投票とも重なっていたため、北上田氏は投票率が気になるらしく、まだの人は講演後、直ぐにでも投票してほしいと呼びかけていた。たまたま県民投票の取材で来沖していた横浜教区の信者で、共同通信の記者である中川克史氏も会場に顔を覗かしてくれた。

仲井間弘多前県知事が2013年12月末に辺野古の予定地の埋立を承認して以来、すでに5年が経過した。沖縄防衛局は、2014年夏に海上ボーリング調査を開始。それ以降、多くの県民が、工事車両の進入を阻止しようと、連日、工事現場入り口となる、キャンプ・シュワブのゲート前で座り込んでいる。機動隊が暴力的な強制排除を続けるが、人々は屈しない。石材を搬出する砕石場、海上搬送の積出場などでもダンプトラックの前で抗議行動が行われている。海上でも海上保管官らの規制に抗しながら、カヌーと船による果敢な抗議行動が続いている。

2018年3月北上田氏らの公文書公開請求に対して、土質調査の報告書が初めて公開され、驚愕の事実が明らかになった。大浦湾の水深30mの海底に、厚さ40mにわたってマヨネーズ状の超軟弱地盤が広がっていることが判明したのである。この調査報告書は2016年に纏められていたが、丸まる2年間、防衛局はダンマリを決め込んでいたのである。沖縄県もこの軟弱地盤問題を重要視して、県の埋立承認「撤回」の最大の理由にしている。政府のシナリオとしては、このまま沈黙を続けて、前宜野湾市長の佐喜眞敦氏が知事選で当選すれば、設計概要変更を申請するつもりだったが、その目論見は見事に外れた。玉城デニー氏が大勝したのである。これ以上軟弱地盤の隠ぺいは無理だった。安倍首相は2019年1月30日に国会で、辺野古の軟弱地盤を認めた。防衛局は3月7日に軟弱地盤をめぐる、地盤沈下の恐れがあることを認めた。それでも工事は可能であると強弁している。

そして県民投票の結果であるが、なんと投票者の70%以上の人が基地に反対したのである。常々安倍首相も菅官房長官も「沖縄に寄り添う」と事あるごとに口にする。沖縄に

寄り添うとは民意を尊重することではなかったのか。しかし県民投票の翌日には土砂投入が継続された。「辺野古の原状回復は不可能だ。土砂投入が始まっている。基地を認めるしかない」として県民が諦めるのを待っているのだ。しかしこれは印象操作に過ぎない。今回の埋立区域は全埋立面積の4%、土量では0.7割に過ぎない。菅官房長官は「日本は法治国家である」と菅節（すがぶし）を繰り返す。しかし北上田氏は言う、辺野古では違法工事が繰り返されると。知事の承認を得ないまま工程を変更し、辺野古側からの埋立を開始したことやまた民間栈橋からの土砂海上搬送に伴う多くの違法行為。土砂の採取場所の届もなく、土砂の性状にも「重大な疑義」があること。細粒分含有率変更に対する政府の開き直り等々数々の違法行為が繰り返されているのだ。

政府が建設しようとしている基地は普天間基地の代替施設ではなく、あらたな機能を持った「辺野古新基地」と呼ばれている。辺野古新基地はその規模において普天間基地とは格段の差がある。滑走路はV字型に2本作られ、それに隣接して長さ272mで強襲揚陸艦が接続できる係船機能付き護岸も設けられる。さらに弾薬搭載エリアや燃料栈橋等、普天間飛行場にはなかった多くの機能を備え持つことになる。事実上の「新基地」である。

安倍政権は普天間飛行場の「危険性の除去」を声高に叫び、そのためには「辺野古に基地を建設することが唯一の選択肢」と主張している。そう主張することで辺野古新基地の建設に反対することが、あたかも普天間基地の危険性除去に反対しているかのような印象を与えようとしている。イメージ戦略である。そもそも論で恐縮だが、普天間飛行場（基地）の返還はいまから23年前、すなわち1995年9月に起きたある不幸な事件に起因している。それは米兵3人による少女暴行事件である。米軍は日米地位協定を根拠に、彼らの起訴前の身柄引き渡しを拒否した。この植民地意識丸出しで、やりたい放題の米軍と米軍の言いなりになっている日本の国の弱腰外交に対して県民の怒りは、その年10月の沖縄県民総決起大会でその沸点に達した。日米両政府は沖縄側の怒りの鎮静化のために普天間の返還を持ち出したのである。したがって政府側の普天間飛行場の危険性の除去は後付けの理由なのである。

最後に、北上田氏の言葉でこの拙稿を終わりたいと思う。「何よりも県民が決して諦めないこと、そうした県民の強い意志がある限り、辺野古新基地建設は必ず頓挫する」

(平和委員会 稲福捷夫)

2019年3月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2019年3月5日(火) 10:00~12:30 開催場所: 教区センターホール(安里教会)

1. 報告及び連絡事項

- ・前回(1月会議)の議事録に沿って新田が報告と確認。
- ・司会の古川神父より司教、司祭の休暇、会議、研修会等の不在予定を報告。
- ・3月17日に大城神父様3回忌追悼ミサが開南教会で午後2時から行なわれる。
- ・6月23日の慰霊の日が日曜日に当たるため、平和巡礼をどうするかが問われたが、教区平和委員会としては従来通りに行う方向で準備を進めていくことが報告された。
- ・ロドニー神父から、2月22日から23日、東京で行われた船員司牧(AOS)に関する研修会と、2月28日から3月2日にかけて福岡(長崎管区)で開催された、日本カトリック難民移住移動者委員会(J-CaRM)、全国研修会についての報告が行われた。

2. 審議事項

- ・マーシーさんより2019年度の教区予定表が配られ、記載漏れや追加等の確認作業が行なわれた。
- ・カテキスタ及び終身助祭養成プログラムについて、担当の新垣助祭より受講申込用紙等の具体的な案が提示され、概ね2年間の養成期間になること、基本的にカトリック信者を対象にしたプログラムとなることなどが報告された。
- ・マーシーさんから、在沖縄米国人信徒たちから、「いのちへのまなざし(Pro life)」ミサの提案が寄せられているとの報告があり審議された。教区としては命の尊さについて賛同し、ミサを捧げて祈りの場としたい意向であるが、そのためのデモ行進等のアピール活動は控えた意向であることが伝えられた。
- ・ウェイン司教より、2019年定例司教総会の報告が行われた。まず、典礼委員会からの報告として、新たに日本聖書協会共同訳が出版されたが、今のところは、従来の新共同訳とフランススコ会訳を典礼では使うよう要請があったこと、また聖歌についても、認可された典礼聖歌集とカトリック聖歌集をメインにして選曲するよう要請があったことが報告された。また、信仰宣言についてはニケア・コンスタンチノーブル信条や使徒信条、どちらか一方に偏ることなく、両方を歌うか唱えるようにする等の要請があったことが報告された。なお、教皇様の訪日については、まだ日程が調整中で、確定していないことも報告された。
- ・教区の日について、古川神父とマーシーさんから報告と反省点、今後の課題が述べられた。
- ・津波古事務局長より、2月10日に行われた信徒評議会の報告が行われ、15の小教区から全員が参加したことや、参加者の意見などが紹介された。これを受けて、ウェイン司教からは、年3回程度信徒評議会を開催していきたい旨要望があり、信徒代表だけではなく、毎回交代で信徒の参加を呼びかけて、様々な課題について話し合う場としていければ良いとの提言があった。
- ・各小教区の活動報告。今回は宮古平良教会とコザ教会。
 - ・宮古平良教会
藤澤神父が準備した資料をもとに、平良教会の日毎、週毎、月毎の活動が報告された。名簿の上では930名余の信徒の記載があるが、日曜日のミサの参加者は30名余と少ない。幼稚園と保育園があるので、それを生かした取り組みができればとの報告がなされた。
 - ・コザ教会
ヨアキム神父が報告。名簿上は信徒数451名を数えるが、維持費納入者は70名程。主日のミサに参加する人数は75~85人。月1回、初金曜日に司祭と助祭が病人訪問を行っていること、毎週木曜日に聖母の騎士の活動、金曜日にロザリオ、聖体讃美式、ミサが捧げられていること、月の第3土曜日に司祭マリア運動、毎週日曜日に教会学校が行われていること等が報告された。
- ・次回4月の活動報告は真泉原教会が行う。
- ・人事異動についてウェイン司教から報告があり、新任地に赴く司祭たちに任命書が手渡された(8ページ参照)。人事の発令は復活の主日の後の4月22日(月)付けで、新任地着任期限は4月26日(金)となる。信徒の皆様のご協力とお祈りをお願いいたします。
- ・司祭の異動に伴い、教区における各任務の担当者も一部が変更された。
青少年・サマーキャンプ・養成担当: ヨアキム神父
司教館長: フランシス神父
カリタス・ジャパン担当: マーシーさん
- ・その他
- ・典礼担当のブイ神父から、聖なる油についての典礼上の変更について報告があった。聖香油のミサで司教によって聖別された香油、ならびに祝福された洗礼志願者の油と病者の油を受け取る式を小教区で行い、これらの油を信者に示してその役割を伝えることができるようにして欲しい。パンフレットが各小教区に配られるが、聖香油ミサで頂いた3つの油は、信徒の前で披露することが求められているとの報告があった。
- ・広報部長より教区報に記載ミスがあったことが報告され、原稿の緊急かつ重要な訂正については、メールではなく電話で一報を入れ、訂正が確実に伝えられるようにして欲しいとの要望があった。
- ・次回の拡大司祭・助祭会議は4月2日(火) 10:00~12:00教区センターにて行われる

2019年3月9日

記録: 新田 選

承認: ウェイン・フランシス・バートン司教

声 角笛

皆が一つになるように

開南教会

或るシスターから電話がありました。「もうすぐ始まるわね、あと三十分程かしら、祈っていきましょう」と。そして、フォコラーレの創立者キアラ・ルービックの帰天十一年にあたりフォーラムとミサが当教会で行われました、三月三日の事です。

フォーラムではみ言葉に根ざしたキアラとフォコラーレの成り立ちについての映像を通しての黙想、各個人の体験談は近所の人との関わりや普段の仕事であった事、震災から二十四年経つ事、ジェンフェストに参加した事など、祈りと勇氣に支えられたものでした。

ミサの中でウェイン司教より「ミサはもちろん大事ですが、それ以外にも普段から分かち合いは大切ですね。また人と人の間に壁はいりません」と語られました。限られた時間ではありましたが、終わった後で、先に行われたフォーラムもミサの一部であった事、全体を通して一つに繋がっていた事に気づかされ



ました。

また参加された方からも、最初からキアラの祈りまで、心に染み通る感じで以下のような感想を頂きました。

■初めて参加された方の声

◎素晴らしい時間でした！キアラさんのビデオ、フォコラーレの皆さんの体験談は頭ではわかってはいる事だけど、実行するには簡単じゃない、だけど早速実践してみたい、真似してみたいと思うことが多くありました。相互愛、一致について。家庭、職場、私の置かれている場を思い浮かべました。家族や仕事仲間にも助けられ、トラブルのない毎日ではありますが、愛の内に

ある一致が存在しているかという自信がありません。

他人に求めるだけの貧しい心が時折、出現します。その貧しい心に打ち勝つ、憐れみの心をも身につけたい。他人への赦しも憐れみをもって行い、他人の苦しみを自分の事のように思い寄り添う。その積み重ねが一致へ一歩一歩近づくでしょう。

そうして神の存在を知り、知らせることになる。み言葉とキアラさんのメッセージが体中響きました。自分を見つめ直す反省も沢山しましたが、これから生活していく上での大きな力もいただきました。機会を与えて下さった神とフォコラーレの皆さんに感謝いたします。(H・S)

◎フォコラーレの集まりは初めての参加でした。毎日時間に追われる中で、ホッとして暖かい気持ちになりました。特に高校生生の体験談(ジェンフェスト)の発表に、こうして信仰を育てていくことが大事であると感心しました。穏やかな口調に素直な心が現れているようで、その成長を見守ってあげたいと思いました。いつもウノ(フォコラーレの月刊誌)を読んで、体験による信仰の成長を見ることが出

来て、自分自身も恵みをいただいています。(Sr. U・C)

私たち一人ひとりとは弱く、それぞれが抱える問題は様々ですが、どんな試練や暗闇の中でも、前に進むしかない共通の気持ちを分かち合うことができたか

と思います。

後日もその余波は続いています。改めてキアラの教えである「皆が一つになるように」を胸にたずさえ、歩んでいけることを祈りながら。

(フォコラーレ・赤嶺、新城、佐藤)

教区 NEWS 教会

初誓願式

泡瀬教会

去る三月二十三日(土)、兵庫県宝塚市仁川にある、シヨファイユの幼きイエズス会日本管区本部の聖堂において、当教会出身の曽根聖羅さんが、修道者として



前列中央前田大司教の右がシスター曽根とご両親、その後ろが赤尾、田端両神父

て初誓願のお恵みを頂きました。

大阪大司教区前田大司教の司式されるミサの中で、当初は白無垢の着物に身を包んだ聖羅さんが、修道服を奉獻して誓願を宣立。その後、祝福を頂いた修道服へと着替えて再び入堂し、修道者としての一歩を踏み出しました。式には沖繩からも両親、姉妹を含め、十数名が参列して喜びを共にしました。またサマーキャンプでお世話になった田端神父と赤尾神父も共同司式して下さいました。

初誓願を立てられたシスター曽根聖羅さんは久留米信愛に席を置いて、これから勉学に入られるそうです。ウェイン司教が管区長様に宛て送られた手紙が紹介されていましたが、いつか沖繩にも来られて、活躍してくださることを祈念したいと思います。

(仲村みちよ)



「ごらんよ空の鳥」「マラナタ」でお馴染みの
作曲家 **新垣 壬敏**

講演会・コンサート

演題：「肝ぐるさんは主の御心」

● カトリックコザ教会聖堂にて

どなたでもご参加いただけます。(自由献金)

2019 年
5月19日
午後2時～

出 演

メソソプラノ **兼 嶋 麗子**
テナー **石 垣 真秀**
ピアノ **砂 川 聖子**
教区聖歌隊 **カンタカトリカ**
・指揮・石垣陽一郎・ピアノ・砂川聖子

ヴォーカル アンサンブル **G4**

・Ten1 新城 哲夫・Bar 宮城 敏
・Ten2 塩浜 康男・Bas 照屋寛八
・Piano 宮城 佳代子

演奏曲目

今日神の声を聞くなら
求めなさい
私は道・真理・命
わたしのもとに求めなさい
はるかな道を
肝ぐるさんしゅの御心
復活された主に出会い
聖家族賛歌
金子みすゞ合唱曲集「こゝろまでしょうか」より
こゝろまでしょうか
星とたんぽぽ
はちと神さま
わたしと小鳥とすずと

主催：カトリックコザ教会 50 周年実行委員会 / マラナタの会

協賛：・カトリック那覇教区・日本キリスト教団 / 平良川伝道所 / 石川教会 / 与那原教会

◆ 問い合わせ・大城 庸秀 Tel.080-3964-3573 ・林 利行 Tel.080-9106-0279

2019年度 那覇教区司祭の人事異動

教区長 ウェイン・フランシス・バートン司教

※ご復活の主日後の2019年4月21日(日)付けで司祭の人事異動を行います。
新任地着任の期限は2019年4月26日(金)とします。() 内は前任地など

- ◆開南教会：古川 政孝 神父 (安里教会)
＝コンヴェンツアル聖フランシスコ修道会
- ◆安里教会：フランシス・グエンドウク ティエン 神父 (開南教会)
＝那覇教区司祭
- ◆首里教会：モンディロ・ロドニー マドゥラ 神父 (安里教会助任)
＝フィリピン宣教会
- ◆真栄原教会：ヨアキム・ファン ディン ホアイ 神父 (コザ教会)
＝那覇教区司祭
- ◆普天間教会：セクエイラ・ナビーン ジョセフ 神父 (与那原教会と
小緑教会助任)＝カプチン会
- ◆コザ教会：ピーター・ファン ヴァン チェ 神父 (具志川教会)
＝那覇教区司祭
- ◆泡瀬教会：ヨセフ・ブイドウク ユウン 神父 (名護教会)
＝那覇教区司祭
- ◆具志川教会：カンティラーノ・サニー 神父 (石垣教会)
＝フィリピン宣教会
- ◆石川教会：ロドリゲス・アジット 神父 (普天間教会)
＝カプチン会
- ◆名護教会：ボスコ・ジュオン チュンティン 神父 (泡瀬教会)
＝那覇教区司祭
- ◆石垣教会：マイケル・グエン スアン ヴィン 神父 (首里教会)
＝那覇教区司祭

有馬 マテオ 神父＝開南教会名誉司祭 (真栄原教会)

稲国 安彦 神父＝教区名誉司祭 (石川教会)

※上記以外の小教区の主任司祭及び担当司祭は留任。

聖香油ミサのご案内

来る四月十七日(水)の午後七時
から、安里教会で執り行われる聖
香油ミサは、本来聖なる過ぎ越し
の三日間の第一日目、聖木曜日に
行われるミサです(当教区のように
に離島の教会を有する教区では、
司牧的配慮から前日に行われるこ
とがあります)。

司教は司祭団と共同司式のミサ
を行い、その中で司祭団は司教の
前で司祭叙階の日の「司祭の約束」
を更新します。

「キリスト」とは、油注がれた者とい
う意味です。旧約聖書では、王、祭
司、預言者が注油を受けていまし
た。イエス・キリストは新約の唯一
の大司祭、預言者、王として、油注が
れた者キリストとよばれます。

このミサの中で、向こう一年間に
使用される聖香油の聖別と、洗礼志
願者の油、病者の油が司教により祝
福され、各司祭に配られます。

信徒の方も積極的にこのミサに
参加するよう招かれています。

計 報

◆開南教会

フランススコ 一杉 光男 様
二〇一九年三月三日帰天 享年六十三歳

アグネス 與那嶺 奈津子 様
二〇一九年三月十四日帰天 享年五十一歳

セシリア 宮城 菊枝 様
二〇一九年三月十八日帰天 享年九十三歳



私たちは故人とご遺族の意向
を最優先に考えます。何でもご
相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

http://w1.nirai.ne.jp/yasurai

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

葬祭の
「やすらい企画」

24時間
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～

そうてんしゃ

葬 典 社

*創業30数余年・・・。

*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるための
お手伝いをさせていただいております。

*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間
受付

てんごく

☎098-853-1059

